

一休という多面体

その〈像〉と語り

しん によ 森女をめぐって

—戦後知識人に語られる

一休の〈像〉—

飯島 孝良

一休を語るうえで、そのエロスをどのよう
に考えるべきか、ひとつの問題となってい
る。それはまた、晩年の一休に連れ添ってい
たという森女とは誰なのか、という問題にも
なってくる。一休は『狂雲集』で森女との純
愛を詠い、生々しいまでのエロスを赤裸々に
描いている。これは室町禅林文学では勿論、
それまでの漢文学でも類をみないものとなっ
ている。また『狂雲集』五四八と五四九によ
れば、文明二年〔一四七〇〕十一月十四日、
一休七十七歳のときに住吉神社の薬師堂で森
女と出逢ってその艶歌を聴き、翌年春に住吉
の雲門庵で再会して、互いの思いを確認した
という。その記述からみえるのは、この森女
は盲目の女性で謡を事としていた、という程
度である。但し、『真珠庵文書』の「祖心紹
越酬恩庵根本次第聞書案」には、文明七年
〔二四七五〕、一休八十二歳の時に酬恩庵内に
敷地を買い取ることになったが、資金の一部
を森侍者の衣服を売って用立てた、などと記
載がある（東京大学史料編纂所編『大日本古
文書 大徳寺文書別集真珠庵文書』巻一、東
京大学出版会、一九八九、一七八頁）。森女

が、一休の周辺にいたのは確かである。

だが、森女の謎については、水上勉（一九九〇二〇〇四）の『二休』（中央公論社、一九七五、三〇一頁）での次の一節が問題点を端的に指摘している。

私はこの住吉の森女との出会いを、日本禅宗の中でもっとも美しい、人間味あふれた光景として思いえがく。そうして、それを思いえがくことよって、一年後の再会の歓喜ぶりと、あふれるような素志をつらぬいて、一方は出家の、一方は盲者の垣根をこえて、肉体的に結ばれて、何の悔いものこらぬ悦楽境を、一休に味わわせてしまう経過は瞭然とする。だが、この一休にとつて、歴史的事件といえるこのことをなぜか墨齋『年譜』は削除する。

直弟子による『年譜』は師の一休を高めて記述する意図もあってか、森女との赤裸々な関係などは指摘されない。その意味では、水上勉ら戦後の文学者は、『狂雲集』や『年譜』などは参照しながらも、どうしても不明な点は何とか「思いえがく」ことのでつなげていく、

という創造的作業を取らざるを得なかったようである。

加藤周一（一九一九〜二〇〇八）はというと、一休を「ありうべき自己」として描出しようとさえしていた。日本の敗戦を目の当たりにした加藤は「日本的なもの」に嫌気がさして「西洋的なもの」を理想化するようになっており、「すべての「後れ」を日本社会によつて代表させ、「進み」を想像上の西洋と一体化して考える傾向を、どうしても避けることができなかった」という（『統羊の歌―わが回想―』岩波書店、一九六八、八頁）。にもかかわらず、加藤は六十年代に中世日本の仏教者を積極的に論じるようになる。親鸞や道元を論じるとともに、「生来感覺的なよろこびをもとめ、殊に男女の交情が感覺の愉しみに転ずる境を貴ぶ」と加藤は述べる（『三題断』筑摩書房、二〇一〇、一八五〜一八六頁）。そのためか、加藤は、かねてから一休の『狂雲集』へ憧れにも近い同感を禁じ得なかったのだという。敗戦直後にあたる二十代の頃の加藤は所謂晩熟で、女性との関わりが「たとえあつても、私は大へん臆病であつた」

ともいう（『続羊の歌』、十一頁）。それはまた、敗戦という日本とそれに向き合う自己の無化を契機として、戦後日本に新たに打ち立てるべきものを模索しようとする在り方を示すものとも考えられる。

そして、加藤は『日本文学史序説』（一九七五）などでも繰り返し「一体を論じ、自己を抱える「矛盾」を透徹しようとして詩作という格闘を続ける禅僧と捉えた。つまり、破戒を重ねる禅僧という「矛盾」を抱えた一体は、内的経験（悟り、詩的経験、肉体的経験）の絶対性を意識しながらも、仏法で伝統的に重んじられてきた戒律（諸悪莫作・衆善奉行）がそれを超越することも自覚していた、というのである（加藤周一「一体という現象」『日本の禅語録十二 一体』講談社、一九七八、三十八頁）。これは、はじめ小説としてしか描かなかった部分を、評論として深めていく過程を示しているように思われる。これについては、唐木順三（一九〇四—一九八〇）の「加藤周一とつくりだす精神」（『唐木順三全集』第十二巻、一九六頁）も、「つくりだす」こと以外に何の処方があるうか、というのが

彼の「一貫した原則」であり、これが加藤のすべての方法論に通じると指摘している。

こうして、二十世紀の「一体（像）」構成には、主にふたつの特徴がみえるように考えられる。ひとつは、謎は多いが極めて魅力的な一体を、（幾分無理やり）でも史実の「穴埋め」をして、提出する、というもの。もうひとつは、作者の「問題意識」を、一体の〈像〉を通して解き明かそうとする、というもの——現代社会の矛盾、「禅」とは何か、日本文化の「伝統」を再考する、といったものを、一体を語ることで考えるのである。それはつまり、史実という「点」を、小説という「線」でつなぐような創造的な試みであったといえよう。

【注】「一体の〈像〉」と戦後知識人については、以下の論致を参照——拙著『語られ続ける「一体像」』（ベリカ本社、二〇二二）序論および終章、ないし拙論「日本の「伝統」を再考すること」（唐木順三『禅と自然』解説、法藏館文庫、二〇二二）。

飯島 孝良（いじまたかよし）

花園大学国際禅学研究所専任講師。専攻は禅文化史・日本宗教思想史。主な著作に、『語られ続ける「一体像」—戦後思想史からみる禅文化の諸相』（ベリカ本社）ほか。